

教育目標・評価学会 第34回大会プログラム

2023年11月25日（土）～11月26日（日）

会場：追手門学院大学総持寺キャンパス

第1日目（11月25日）

10:00

現理事会（10:00-）
新理事会（11:00-）
（A412）

12:00

13:00

受付

13:30

課題研究Ⅰ
教育・学習・評価・承認
（A421）

15:30

15:45

課題研究Ⅱ
教育目標・評価研究の理論と実践を
発展させる教育実践研究とは
（A421）

17:45

第2日目（11月26日）

9:30

自由研究発表

分科会1
（A411）

分科会2
（A412）

分科会3
（A431）

11:50

12:20

総会（A481）

13:10

受付

13:10

13:30

公開シンポジウム
高大接続の課題を
思考力・表現力・探究する力の
観点から検討する
（A421）

16:00

※会員控室はA481です。

参加費：正会員・当日臨時会員とも3,000円
（学生会員は2,000円、公開シンポジウムのみ参加の場合は無料）

お問い合わせ先：教育目標・評価学会 第34回大会実行委員会事務局

〒567-8502 大阪府茨木市西安威2-1-15 追手門学院大学 安威キャンパス

鋒山泰弘研究室気付 メールアドレス hokoyama@otemon.ac.jp

参 加 要 項

1. 受 付

1日目（11月25日） 13:00～ 総持寺キャンパスのアカデミックアーク棟4階
A421教室前にて

2日目（11月26日） 9:00～ 同上

* 公開シンポジウムのみ参加希望の方については、2日目13:10から受付を行います。

2. 懇親会

今年度は懇親会は開催しません。

3. 発 表

- (1) 課題研究で配布資料を当日持参される方は100部、公開シンポジウムについては150部ご準備ください。
- (2) 自由研究発表は、発表時間を25分、個々の発表に対する質疑応答の時間を15分とします。なお当日配布資料を持参される方は、60部印刷してご持参ください。資料が不足しても事務局では増刷りいたしませんのであらかじめご了承ください。
- (3) 会場には、プロジェクタとスクリーンを用意しております。パワーポイント等を使用される場合はご自身のパソコンをご用意くださるよう、お願いいたします。

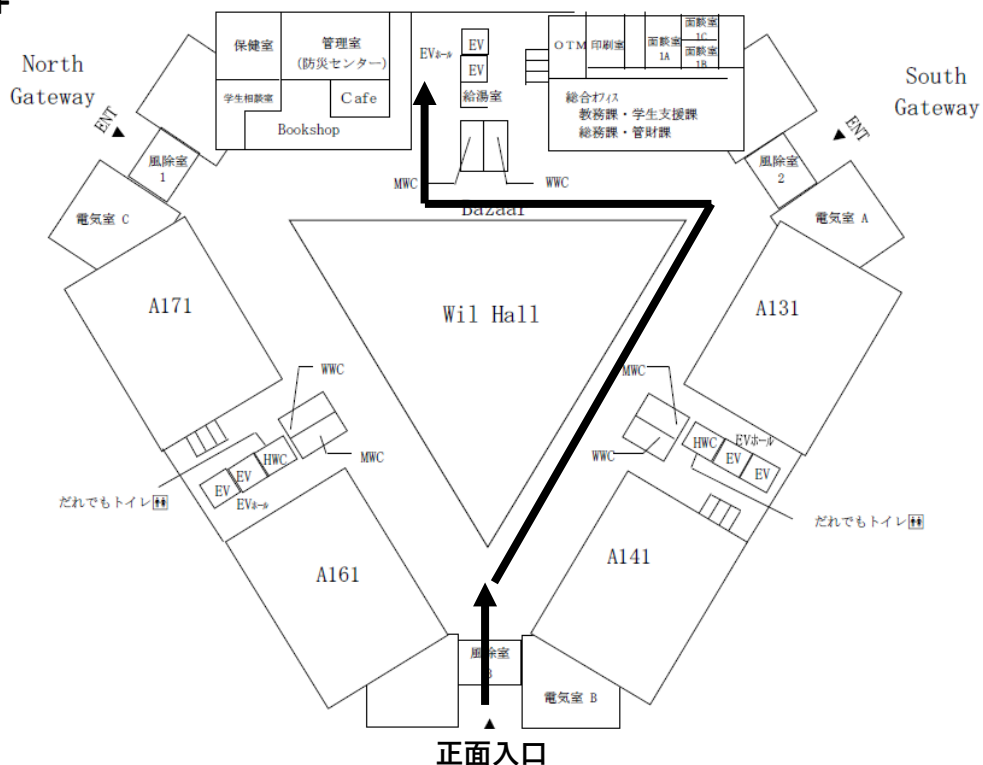
4. 総 会

2日目の12:20～13:10に会員総会を開催いたします。会場はA481教室です。予算や活動方針などを話し合う年一度の機会ですので、多数ご参集ください。

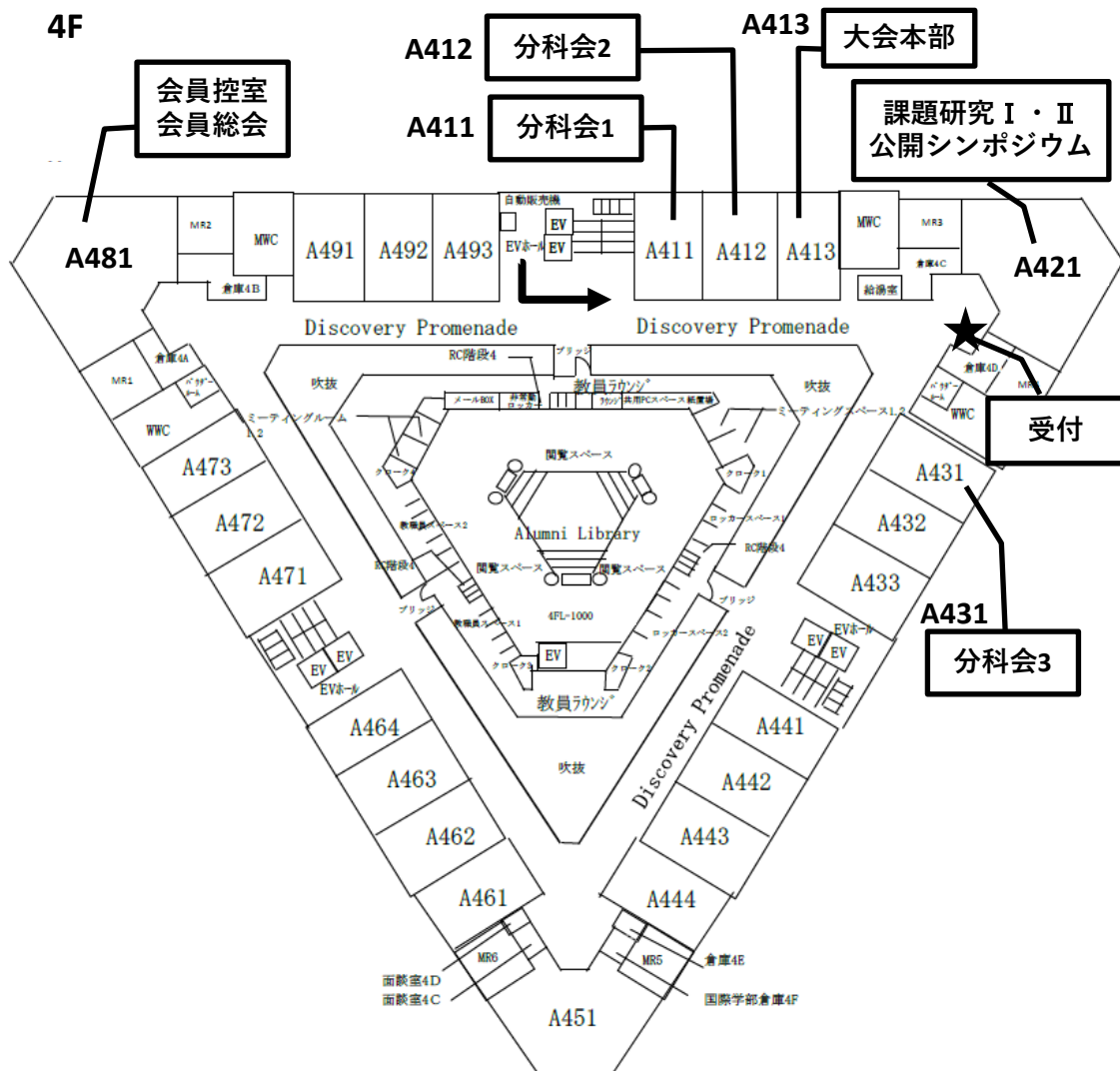
5. その他

- 駐車場は使用できませんので、公共交通機関を利用してお越しください。
- 昼食は各自ご持参ください。JR総持寺駅からキャンパスまでの道のりにコンビニエンスストアがあります。また会場の総持寺キャンパスの向かい側にはショッピングセンターがあります。
- 学会事務局・大会事務局ともに、宿泊先の紹介・斡旋は行いませんので、あらかじめご了承ください。
- 大会期間中に、会員の皆様の執筆された論文を交換していただくコーナーを会員控室A481に設けます。ご自身の論文の配布を希望される方は、大会会場にお持ちいただき、各自で同コーナーにお置きください。また、論文を入手されたい方は、ぜひお立ち寄りください。

1F



4F



課題研究Ⅰ

教育・学習・評価・承認

「教育評価」とは「教育活動に反省を加えて、修正・改善する」ためのものであるとする考え方がある。この考え方は、学習のできばえによって子どもを「ねぶみ」するような、評価の現実の姿へのアンチテーゼとして強調されてきたと言ってよいだろう。

もちろん、教育評価についてのこのような考え方においても、子どもの学習の状況が評価される局面が必要であるとはされてきた。が、それはあくまでも、教育活動の反省に必要な情報を得るための、教育評価に従属する「学習評価」として位置づけられていると言ってよいだろう。

これに対して、上記の「ねぶみ」とは全く異なるのだが、子どもの学習を評価することをより重要視する考え方もある。それは、教育者による子どもの学習の評価を介しながら、子どもが自らの学習のモニタリングをできるように促していこうというものである。「学習のための評価」というコンセプトは、こうした考え方に基づくものであるだろう。

このような意味で学習が評価の対象とされるのは、有意義なことであると思う。だが、そのこととともに、あるいはそのことを通じて、子どもが「承認」されることが望ましい、あるいは必要なのではないか。承認という行為・関係の核心は、その相手の存在そのものを肯定することである。教育は、子どもに何かを教え、子どもによるその学習を捉え評価することを通じて、子どもを学習の主体として育てながら、子どもの存在それ自体の肯定＝承認がそこに伴っている必要がある。

以上のようなことが言えるか、言うことに意味があるか。言えるとして、言うことに意味があるとして、より精密に、承認は教育・学習・評価とどのような関係にあると考えるべきか——それらを検討していきたい。

報告者

承認の社会理論は評価を変えるか？ 概念の整理と教育学的翻案の試み

神 代 健 彦（京都教育大学）

自己と世界との出会い直しのなかに生きる評価

仲本正夫の教育実践に即して

本 田 伊 克（宮城教育大学）

司会・コーディネーター

長谷川 裕（琉球大学）

課題研究Ⅱ

教育目標・評価研究の理論と実践を
発展させる教育実践研究とは

『教育目標・評価学会紀要31』（2021）の編集後記では、「教育実践研究論文」に関して、「データの収集と分析・考察のレベルをどこまで求めるのかについては、査読者の間で意見も分かれ、（中略）『教育実践研究』として、どのレベルまでのオリジナリティや実証性を求めるかについては継続的に議論していきたい」と指摘された。こうした問題意識が、本課題研究のテーマ設定の背景の一つである。

他方、教職大学院における理論と実践を往還する教育実践研究が、歴史的に蓄積され、全国への広がり成果も検証されつつある。その中で、教育実践研究に求められるものが、教師としての成長につながるためには、学校における実践的な課題を解決するためには、そして、学術研究として価値をもつためには、など、いくつかの方向から問われている。また、その際、それらは一つの方向に調和的につながるのか、対立や矛盾をはらみつつ、優先順位の選択の問題なのかも知って問われている。

誰のための教育目標・評価かが問われる今日、誰のための教育実践研究かについても問われている。「教育実践研究」における教育実践は、それ自体、教師の創発性やオリジナリティを持つ学術的にも価値があるものとして扱われる場合もあれば、分析の対象となる「データ」として吟味され、客観性、妥当性、信頼性のある「エビデンス」として扱われる場合もある。教育実践における学習者の学び自体、創発性やオリジナリティや著者性を持つものとして扱われる場合もある。

教育実践研究は教育実践を対象とした研究であるが、実践主体と研究主体との関係で分類すれば、実践主体自身が自らの教育実践を対象化した研究と実践主体以外の研究者がその教育実践を研究したものに2分できる。後者はさらに、アクションリサーチなど研究者が実践者と何らかの形で協働し、その実践の計画段階より参加や関与を行い、一定の程度において実践内部から研究する場合と、実践後にフィードバックをすることはあっても、基本的にはその教育実践に対して外部から研究する場合とに分けられる。本課題研究においては、主に、実践主体自らが自身の教育実践を対象化した研究を取り扱う。そのうえで、3名の報告者と2名のコーディネーターがともに、課題を共有し、論点整理と課題の焦点化を進めたうえで、本課題に迫っていききたい。

報告者

長期実践研究報告と学術研究論文の間で

——専門職養成における研究をめぐるジレンマ

遠 藤 貴 広（福井大学）

研究と実践の融合における課題

——OPPA論による教師の教育観の変容を中心として

中 島 雅 子（埼玉大学）

歓待としての「教育実践記録」

——教育目標・評価の理論・実践を発展させるために

吉 原 大 貴（千代田区立九段中等教育学校）

司会・コーディネーター

岸 本 実（滋賀大学）

徳 永 俊 太（京都教育大学）

自由研究発表

09:30-10:10 第1発表者 11:00-11:40 第3発表者
10:10-10:50 第2発表者 11:40-11:50 総括討論

分科会 1

A411

司 会 木 原 成一郎（広島大学）
藤 本 和 久（慶應義塾大学）

自発的なカリキュラムの開発過程における授業と評価に関する教師の認識変化
——韓国のあるK市S学校教師の事例を中心に

金 聯 珠（神戸大学大学院）

高校世界史教師の授業改善と力量形成
——論述課題とルーズブリックの作成を中心に

中 村 洋 樹（四天王寺大学）

教職課程における教師観の形成とOPPA
——教職課程コアカリキュラム「教職の意義及び教員の役割・職務内容（チーム
学校運営への対応を含む。）」を中心に

石 田 耕 一（埼玉大学）

分科会 2

A412

司 会 木 村 元（青山学院大学）
山 崎 雄 介（群馬大学）

イタリアの公教育における教育目標としてのSDGsの位置づけ
——市民性教育との関係に着目して

徳 永 俊 太（京都教育大学）

岩手県三陸漁村の戦後初期コア・カリキュラム運動と地域社会形成
——気仙郡広田村の場合

後 藤 篤（宮城大学）

中内敏夫による公害学習現地調査の実際

北 林 雅 洋（香川大学）

自由研究発表

09:30-10:10 第1発表者

11:00-11:40 第3発表者

10:10-10:50 第2発表者

11:40-11:50 総括討論

分科会 3

A431

司 会 赤 沢 早 人（奈良教育大学）
二 宮 衆 一（和歌山大学）

評価者を育むピア・アセスメントの検討
——総合的な探究の時間における実践を事例に

直 井 良 太（千代田区立九段中等教育学校）
吉 原 大 貴（千代田区立九段中等教育学校）

児童・生徒の能動的な探究を高次のフェーズに誘う教師の指導に関する実践的検証
——問いに答える子供から、探究的に問うことができる子供へ

豊 嶋 啓 司（福岡教育大学）
坂 井 清 隆（福岡教育大学）
木 下 祥 一（福岡こども短期大学）
井 手 司（福岡教育大学附属福岡小学校）
土 橋 亮 太（福岡教育大学附属久留米中学校）
柴 田 康 弘（飯塚市教育委員会）

「羅生門的評価」とは何か——整理と確認

根 津 朋 実（早稲田大学）

公開シンポジウム

高大接続の課題を思考力・表現力・探究する力の観点から検討する

大学で学生に求められる学習能力・研究能力と高校教育での学習成果に連続性をもたせるために、近年高校での探究学習が取り組まれ、そしてその成果を「総合型選抜」や「学校推薦型選抜」で認証・評価しようとする動きも広がっている。高校での学習指導要領の改訂にもとづく探究学習の推進、「思考・判断・表現」の観点を入れた観点別評価の導入、共通テスト改革と論述型入試の強調も、それらの動向を後押しする働きをしている。

そこでこのシンポジウムでは、思考力・表現力や探究する力を軸として中等教育と高等教育の目標・評価の一貫性を追究してきた海外での事例研究をふまえ、そこから明らかにされた目標・評価の枠組みを手がかりに、日本における高校教育実践、大学入試方法等を検討することである。

日本の高等学校の「探究的な学習」の指導と評価を調査・研究している大貫会員からは、アメリカの科学教育の目標・評価論の知見をベースに、日本における主に自然科学分野の「探究的な学習」の指導と評価の課題を提起してもらう。

国際バカロレアの研究をされてきた次橋氏からは、大学教育で求められる学習・研究方法の基礎は中等教育段階でどのように目標化されるか、指導と評価ができるのか、という視点を提起してもらい、それにもとづいて現代日本における高校教育改革や大学入試方法等を検討する視点を提起してもらう。

話題提供

高等学校における科学的探究の指導の批判的検討

——米国の取り組みを踏まえて

大 貫 守（愛知県立大学）

高校における探究的な学びの位置づけと評価方法の比較

——国際バカロレアの内部評価・外部評価と日本の調査書・大学入試に注目して

次 橋 秀 樹（京都芸術大学）

指定討論者

渡 邊 久 暢（福井県教育庁）

山 田 剛 史（関西大学）

司会・コーディネーター

鋒 山 泰 弘（追手門学院大学）

細 尾 萌 子（立命館大学）

アクセス

会場：追手門学院大学総持寺キャンパス

